

編集後記

今月の特集は網膜萎縮である。さまざまな背景があるが、なかでもエイジングは大きなリスクファクターと考えられる。自分は角膜が専門で網膜萎縮についてはまだまだ勉強不足であるが、近年、近視の病態を理解するうえで非常に興味をもっている。本号では、強度近視に伴う網膜萎縮についてこの分野の権威である東京医科歯科大学の大野京子先生が書かれている。近視による網膜萎縮は脈絡膜が薄くなることによって起きてくると思っていたが、今回 Bruch 膜や網膜色素上皮細胞も関与することなど、複雑であることがわかり大変勉強になった。

強度近視で網膜萎縮の可能性が高いことは2017年の Tideman らの大規模疫学研究によっても示され、75歳以上では39%で視覚障害を起こすとされる。この研究では加齢とともに視力障害が急激に増える。この間に眼軸長の伸長があるかどうかの記載はないが、眼軸長の継続的な伸長がなくても視覚障害を起こす可能性が高いとすれば、まさにエイジング効果だ。眼軸長の増大が最も大きなリスクファクターだとしても、

加齢が進まない限りすぐに視力障害が起きるわけではないことを考えると、アンチエイジングのアプローチによって近視の視力障害を予防できないかという発想が出てくる。アンチエイジングは現在急速に進歩している医学領域であり、さまざまな介入方法が提唱されている。長寿遺伝子を活性化するレスベラトロール、炎症を抑えるオメガ3脂肪酸、腸内細菌改善などなど。しかしながら近視に伴う網膜萎縮の動物モデルがないのが問題だ。現在使われている近視動物モデルは片眼を形態覚遮断するかマイナスレンズを入れて近視を作るものだ。主にヒヨコとマウスが使われるが発達期の学童近視モデルであり、網膜変性まで起こさない。最近になって Lrp2 ノックアウトマウスという極端な近視モデルが提唱されたが、あまりに強い近視のために網膜萎縮研究に使えるかどうか不明だ。近い将来、近視に伴う網膜萎縮モデルが開発されれば、この領域の研究は急速に進むだろう。

(坪田一男・記)

編集：富田剛司・坪田一男・後藤 浩・飯田知弘・雑賀司珠也・門之園一明・石川 均
編集顧問：所 敬・小口芳久・臼井正彦・澤 充・谷原秀信・岸 章治・三村 治・飯島裕幸

「眼 科」 第61巻 第12号 11月号

2019年11月5日発行（毎月1回5日発行）
定価（本体2,800円＋税）

年間講読料金 定価（本体42,100円＋税）
〔年間13冊（臨時増刊号を含む）の誌代〕
〔年間予約購読者に限り送料無料〕

発行所 金原出版株式会社

発行者 福村直樹

〒113-0034 東京都文京区湯島2-31-14

Tel 03 (3811) 7165〔編集室直通〕

Tel 03 (3811) 7184〔営業部直通〕

FAX 03 (3813) 0288

ホームページ <http://www.kanehara-shuppan.co.jp/>

振替口座 00130-1-191269

印刷所 横山印刷株式会社 Tel 03 (3622) 6161

広告申込先 福田商店 Tel 06 (6941) 5600

・本誌に掲載する著作物の複製権、翻訳・翻案権、上映権、譲渡権、公衆送信権（送信可能化権を含む）、貸与権、二次的著作物への利用に関する原作者の権利は、金原出版株式会社が保有します。

・JCOPY＜出版者著作権管理機構 委託出版物＞

本誌の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。複製される場合は、そのつど事前に、出版者著作権管理機構（TEL：03-5244-5088、FAX：03-5244-5089、e-mail：info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください。